



日本におけるポーランド政府の ブロニスワフ・ピウスツキ 顕彰事業に参加して

ヴィトルト・コヴァルスキ

2013年10月19日、この日は秋の陽光のもと、穏やかで熟成した薫りに包まれていた。その薫りは、葦の匂いも軽く身にまとい、きらきらと輝く傍らの湖から木造の広い公共施設の方へと流れ込んでいた。この日、日本の北海道・白老の地を支配していたのはまさしくこのようなオーラであった。ここには、今日では絶滅しつつあるアイヌ民族の生活を再現した野外博物館がある。すでに亡くなった数世代にわたるアイヌ民族の魂が、この祝典にふさわしい天候を彼らの神々に請い願ったのだ。

アイヌの名誉ある同胞ブロニスワフ・ピウスツキは、1903年に白老でアイヌ人のもとに逗留した。これを記念して、彼の胸像の除幕式が「ポランド」という遠国の政府と北海道の行政府の代表者を迎えて行われるのだ。

まず大きなチセのひとつで、強度に日本化された現代アイヌ人である、野外博物館に勤務する老人たちによる祈祷が行われた。アイヌ人たちの間には、新鮮な白樺の皮で編まれた花冠を頭にかぶった「ポランド」国の文化・国家遺産大臣ボグダン・ズドロイエフスキが腰を下ろした。次には招待された来賓たちが色鮮やかなゴザで飾られたピウスツキ像のもとへ赴き、この出来事にふさわしいいくつかの演説のあと(100名を超える来賓がポーランド語



写真1 除幕式で木村和保氏(左)と筆者

を濃密に耳にしたのはよいことだ)、ズドロイエフスキ大臣が駐日ポーランド大使、北海道副知事らの名士たちとともに除幕を行った。それらの名士たちのなかでもと

Witold Kowalski (1946-) オックスフォード大学大学院修了、ポーランドの作家、ブロニスワフ・ピウスツキの妹ルドヴィカの孫。ブロニスワフに関する多くの著作がある。昨年10月のピウスツキ像除幕記念セミナーで講演を行った。



りわけ注目に値するのは、井上紘一教授で、彼は日本人や、サハリンに暮らすロシア人にブロニスワフの功績をたゆまず伝えてきた布教者である。

次に来賓は湖畔に並ぶチセを巡回し、多種多様なアイヌの踊りや儀式のデモンストレーションを見学した。残念ながらことばの壁のため、出演するアーティストたちの技能を評価することは、外国人には最後まで困難であった。踊りのあと、立派な祝宴の時間が訪れた。そこでは、日本で生まれたピウスツキの孫・木村和保(写真1)が来賓を出迎えた。

シャンパンがほとぼしり、海草類の魅惑的な美しさや、驚くほどツルツルで噛みごたえのある、スライスされた新鮮な(まるで毒入りのような)タコの足を楽しみ、食べかつ賛嘆しながら、何度も杯を合わせて、ポーランド=アイヌ=日本の友情が刻まれた。えり好みしない私の食道に降りかかってきた料理に対する責任感、国際的レベルであると自覚していたので、私は青白い顔をして、褐色の藻や生の海草などをあれこれ味見したのだった。

日本の海底から私の皿へと直接たどり着いたものではない食物に対するノスタルジーを、高級なアルコール飲料で洗い流していたとき、「ポランド」の文化遺産大臣が筆者のもとへ近づいてきた。彼は、ブロニスワフが思春期(1882-85年)に書き残した「日記」のポーランド版完本の初公刊を個人的に援助したいと提案してくれた。大臣は私が編集した「日記」のロシア語版を読み、ポーランド語での出

写真2 除幕式の祝宴でズトロイエフスキ大臣(右)と筆者



版に一役買いたいというのだ。私は驚いて、飲み込んだばかりの「昆布」を吐き出しそうになった。落ち着きを取り戻すと、協定締結の印に、「ポランド」の国家遺産の保護者と、つつましい筆者は色あせた残りのシャンパンのグラスを重ねた=写真2=。

ブロンズ像、ポーランド政府による顕彰、「日記」の原語版の出版の約束、まさにこれこそ、陽光に溢れて香り立つ秋の日がブロンスワフと妻チュフサンマにささげた贈り物である。生者の間にあって二人に寄り添い、彼らとともにこの日を祝福したのは、もっとも強い絆で彼らと結ばれた孫・和保だった。

「わしはその場におった。蜂蜜と……」^{訳注1}

おっと、まだ終わりではない。翌朝、道都札幌の大学で、ブロンスワフにささげる特別な学術セミナーが開催された。

オープニングは駐日ポーランド共和国大使や、ブロンスワフの孫・木村和保と、豪華な顔ぶれであった。続いてセミナーが始まった。最初に井上絢一教授が、セミナーに招待されたが参加できなかったヴロツワフのアントニ・クチンスキ教授からの手紙を代読した。次にワルシャワ大学のエヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授はブロンスワフ・ピウスツキが生きた時代の日本・ポーランド関係の概要を報告した。残念ながら、この講義は日本語で行われ、通訳イヤフォンの不調もあって〈…〉筆者にはほとんど理解できなかった。

最後に、クチンスキ、井上両教授と同様、ブロンスワフ・ピウスツキ研究に貢献したアルフレド・マイエヴィチ教授は、われらの主人公の栄光にいたる道程、そして彼の残した著述や物質文化資料が現世代の人々へ伝えられ周知されて、ヨーロッパやアジアの諸民族のグローバル文化のなかで卓越した地位を勝ち取るまでの複雑ないきさつについて語った。マイエヴィチ教授は英語で話し、日本製の視聴覚機器は、彼に対しては戦いを挑むことなく従順に従った。〈…〉

筆者もこれらの学術的脱線の間割ってはいり、

ピウスツキ族の民族帰属、両親がブロンスワフ、ルドヴィカ、アダム、そしてまたピウスツキ家の他の兄弟たちに授けた、才能や天賦の才のみならず、欠点や苦悩をめぐる遺伝的悶着についても考察することを提案したのだった。

そして筆者が自身の高邁な結論へと到達しようとしていた矢先、小さなサイズのひらひらとした白い衣装を身にまとった、エネルギー満タンの生物集団が会場のなかへ走りこんできたのを目の片隅で確認し、地球外生物の襲撃に違いないと判断して〈…〉話の流れを省略し、急ぎ足で話を終えた。

パニックを起こす必要はまったくなかった。〈…〉それは札幌こどもミュージカルの若い(幼いといってもいい)アーティストたちだったのである。この作品は体育の授業の前のエネルギーッシュなウォーミングアップのようにもみえるし、(関係者の話では)「ピウスツキの蠟管」に記録されたアイヌ語の祈祷のテキストに関する思想的な「ミュージカルオペラ」のようでもあった。〈…〉

「わしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、自分の目で眺め、貧弱な耳で聴いたのじゃ……」

おっと、まだ終わりではない。ブロンスワフについての「オペレッタ」にほろ酔い加減になった北海道大学の主催者たちは、以前の取り決めを反し、マイエヴィチ教授や私の講義の完全な英語テキストを、知識を渴望するインターネット利用者に提供することを決定した。北海道大学の演壇上でパニックを起こした筆者の様子とはうらはらに、そこで語られたことは何ひとつ省略されないことが、業(カルマ)によって決定された。ご興味のある読者諸兄は、以下のリンク(北海道大学 HUSCAP)を参照のこと。

<http://hdl.handle.net/2115/53485>

また、白老の銅像のスポンサーである駐日ポーランド大使館は、この機に「ポーランドの偉人」10人の肖像画入りの小さな(とはいえ価値のある、唯一の)日本郵便記念切手シリーズも発行した。80円切手が10枚並んだシートの上で、ブロンスワフ・



写真3 ブロンスワフ・ピウスツキ像 建立記念切手シート

ブロニスワフ・ピウスツキ像建立記念
北海道白老 ニ〇一三年十月十九日

ポーランドの偉人

ミコワイ・コペルニク(1473-1543)天文学者
ヴィスワヴァ・シンボルスカ(1923-2012)詩人
ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)教育者
ユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)政治家
アンジェイ・ヴァイダ 映画監督
レフ・ヴァウエンサ「連帯」指導者
ヨハネ・パウロ 2 世(1920-2005)ローマ教皇
フリデリック・ショパン(1810-1849)作曲家
イグナツィ・パデレフスキ(1860-1941)ピアニスト・政治家
マリア・スクウォドフスカ・キュリー(1867-1934)物理学者

写真3の記載内容

ピウスツキの胸像が存在感を示している=写真3=。

そのあと10月25日に東京の首相公邸で外務省主催のレセプションがあって、井上教授のご好意でマイエヴィチ教授と筆者もこの歓待にあずかった。公邸を退出するとき、井上教授は安倍昭恵首相夫人(…)に、マイエヴィチ、コヴァルスキ両名の講義を収録し、タイミングよく北海道大学により発行された記念冊子『ピウスツキの仕事』を手渡した。「宣伝広報活動」の領域では常套の、井上教授の作戦は完璧な名人芸だった。安倍首相ご本人に冊子を手渡しても、首相はすぐに(…)その存在を忘れてしまっただろうが、(…)非凡なアイデアでよく知られる昭恵夫人が何かの拍子に、もし同冊子を手にとったなら……

「わたしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、別れ際に首相夫人から彼女の肖像画入りの石鹸のようなもの(もしかするとチョコレート)もいただいた」

今度こそは、終わりがやって来た。

実際は、やって来たのは、終わりではなく続きだった。正確には二日後に、ブロニスワフの唯一の男系の孫であり、ピウスツキ家の男系最後の生き残りの和保(運命は彼に娘のみを授けたから、男系は彼で途絶える)が、ブロニスワフの子孫と家族の集まりに筆者を招待してくれたのである。

読者諸兄に知っておいていただきたいのだが、ブロニスワフはチュフサンマ以外の、いかなる女性との間にも子を持たなかったし、彼の孫、ひ孫、玄孫はすべて、現在は日本に住んでいる。東京のレストランでの会食には、別々の家系を代表する十数名の子孫が集まった。北海道からはブロニスワフの娘キヨの孫・須藤由美と高橋睦雄の両家系、横浜からはブロニスワフの息子木村助造の息子和保の家系の人々がやって来た。全員の名をすぐに覚えるのは不可能で、筆者はすっかり途方に暮れた。

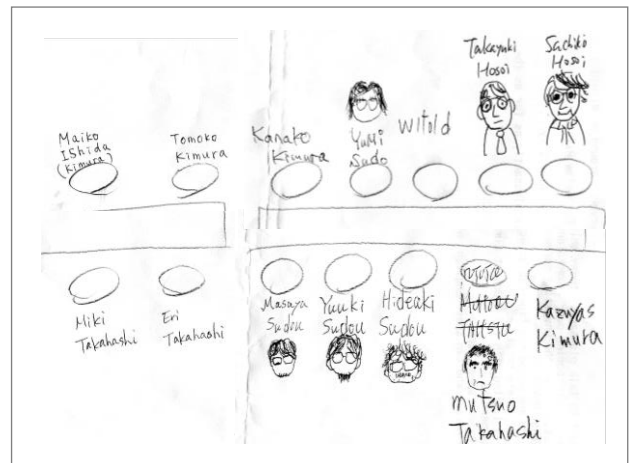
和保の勇敢な長女加奈子は機転を利かせて、ヨーロッパからやって来て頭がのぼせた筆者のために席次図=写真4=を素描してくれた。(…)

状況をよく理解するのはそれほど容易ではなく、推測するのはさらに困難だった。というのも、神ははるか昔に、ことばの壁をわれわれに与えたからである。そこで助けとなったのは、ビールと酒である。カプトイカとヤリイカを交互にかじり、辛い海草の入った料理を食べながら、お互いを理解しなければならなかった。

筆者は日本で10日間暮らしたあと、日本料理のかかえる問題に意識的になった。糖尿病、がん、活性酸素、福島の原子力発電所の最近の事故後に残された放射性同位元素の問題などを知ったので、褐色の海草どころではなかった(名称からしてややこしい。調理後は、この海草はいっそう緑になるのだから)。日本酒は爛でも、冷やでも、何ともいえないほど素晴らしかったが、杯を数杯傾けると、世界はいっそう理解し易くなった。(…)

さらに数杯を重ねるや、畏怖の念を起こさせる睦雄は、1906年に彼の曾祖父ブロニスワフが曾祖母チュフサンマ(と二人の子供)を運命にまかせて、海の彼方へ永久に去った(彼女の業(カルマ)は、彼らにはそういう風にみえた)のは何故か、筆者には本当に分からないのだということを理解してくれた。

写真4 ピウスツキ家の交歓会(上)と席次図(下) 写真 須藤秀明



さらに数杯おかわりをし、睦雄の姉・由美とは、まるで記憶にないほど前の時代から私たちが互いに知っているかのように、親戚として固い握手を交わした。一方で、私は魅力的な加奈子に、自分には未婚の息子がいて、彼女も未婚であることを執拗に説明していた。もし話の折り合いがつかぬなら、何もいうことはない……

これでブロニスワフ・ピウスツキにささげた祝典も終わりを迎えた。「わしはその場におった。蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ……」^{訳注1}

しかし「ポランド」の国家遺産の現在の相続人と締結した協定はどうなるのだろうか。それは守られるだろうか。よく知られているように「神の恩恵はまだら馬で騒ぐ」^{訳注2}。一方では *pacta sunt servanta* (合意は拘束する)ともいわれる。〈…〉昔はそうだった

だが、現在はどうかは、やがてわかるだろう。一年か二年後には、新刊の『ブロニスワフ・ピウスツキ日記』について書評が読めることになるかもしれない。〈…〉 (佐光伸一訳)

^{訳注1} スラブの昔話の結びの決まり文句。「〈…〉蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ……」と続く。

^{訳注2} ポーランドのことわざ、正確には「神の恩恵はまだら馬に乗る」。権力者、金持ちの約束は当てにならないという意味。

ポーランド語原文: Witold Kowalski, “Polska honoruje w Japonii Bronisława Piłsudskiego”

※スペースの都合で、一部割愛〈…〉しました。

《できごと》



ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO



駐日ポーランド共和国大使館

ブワシュチャク新所長 ご来札!

私たちのよきパートナーであり、さまざまな企画でお世話になったポーランド広報文化センターのミロスワフ・ウチュコ前所長が本年1月に任期を終え、2月末に着任されたミロスワフ・ブワシュチャク新所長が4月1日に運営委員会を来訪されました。

新所長はシロンスク県(県都カトヴィツェ)のタルノフスキェ・グルィという人口6万人ほどの町に16年前に日本文化センターを創設し、その所長を長く勤めた経験を踏まえ、「“地方”“文化”という視点から、北海道ポーランド文化協会とよい関係を築きたい」と語られ、6月に開催される二つの例会への全面的な支援を約束してくださいました。(佐光伸一)



ブワシュチャク新所長(前列左から3人目)を迎えて

5月3日「憲法の日」の レセプションに参加



「憲法の日」レセプションで(左から)大使、遠藤、霜田、安藤

5月15日に、コザチェフスキ駐日ポーランド大使主催の「憲法の日」のレセプションにお招きをいただき、安藤(会長)、霜田英麿(東京事務所長)、尾形(運営委員)が参加しました。約300人出席の盛会で、在京会員の遠藤郁子さん、熊倉ハリーナさんにもお会いしました。

大使はご挨拶で、今年は新生ポーランドの出発点となった「自由選挙」から25周年、NATO加盟15周年、EU加盟10周年という節目の年にあたり、ポーランドと日本の友好・協力関係は、政治、経済、文化にわたって飛躍的に発展し、新たな段階に入りつつあると強調されました。(安藤厚)

写真・尾形芳秀

Polska honoruje w Japonii Bronisława Piłsudskiego

19 października 2013 był dniem pełnym łagodnych, dojrzałych w jesiennym słońcu zapachów, z lekka podszytych trzciną, spływających od połyskującego nieopodal jeziora w stronę szeregu obszernych drewnianych chat komunalnych. Taka oto aura zapanowała tego dnia w japońskiej miejscowości Shiraoi na wyspie Hokkaido, gdzie ulokowane jest muzeum i skansen odtwarzający życie wymierającego już dziś ludu Ajnów, pierwotnych mieszkańców tej wyspy. Duchy zmarłych pokoleń Ajnów najwyraźniej wyblagały u swych bogów odpowiednią pogodę, sprzyjającą odbywającym się tam właśnie uroczystościom: rząd dalekiego kraju zwanego *Porando* wraz z władzami wyspy Hokkaido odsłaniał odlane w brązie popiersie zasłużonego pobratymcy Ajnów – Bronisława Piłsudskiego, który w 1903?????? roku bawił jakiś czas wśród nich w Shiraoi.

A kolej uroczystości była taka: najpierw w jednej z wielkich chat odbyły się modły zamieszkującej skansen starszyny dzisiejszych, mocno zjaponizowanych, Ajnów, wśród których zasiadł w wianku ze świeżo nastruganej brzozy kory minister Dziedzictwa Narodowego kraju *Porando* – Bohdan Zdrojewski. Następnie zaproszeni goście (dobrze ponad setka osób, gęsto dawał się słyszeć język polski) udała się pod zasłonięty dotąd ogromnymi kolorowymi *tatami* pomnik wielkiego Bronisława. Po serii okolicznościowych przemówień odsłonięcia dokonał Bohdan Zdrojewski w towarzystwie polskiego ambasadora, wicegubernatora wyspy Hokkaido i dalszych notabli, wśród których wyróżnić trzeba profesora Koichi Inoue, wieloletniego, niestrudzonego propagatora osiągnięć Bronisława wśród Japończyków, a także Rosjan – tych z wyspy Sachalin.

Następnie goście udali się do innej z nadjeziornych chat, gdzie odbył się pokaz przeróżnych tańców i rytuałów ajnuskich. Niestety, bariera językowa nie do końca pozwalała obcokrajowcowi docenić kunszt występujących artystów... Po tańcach przyszedł czas na zasłużoną wyzerkę, na którą gości powitał i sprost żyjący od urodzenia w Japonii wnuk Piłsudskiego – Kazuyasu Kimura. Szampan polał się strumieniami, braterstwo polsko-ajnuśko-japońskie pieczętowane było częstym postukiwaniem kieliszków, przy akompaniamencie obowiązkowego pomlaskiwania i zachwyty nad ponętą urodą podawanego asortymentu glonów morskich czy zadziwiająco gładką przeżuwalnością świeżo skrojonego odnoża rzadko tylko (ponoć) trującej ośmiornicy... Piszący te słowa, świadom międzynarodowego wymiaru kulinarnej odpowiedzialności, jaka właśnie spadła na jego niewybredny przetyk, z poblądnym licem kosztował to gotowanego „brown seaweed” (wodorost „brązowy”), to znowu surowe algi (także wodorost). I gdy szlachetnym trunkiem zalewał tęsknotę za jakimkolwiek pożywieniem, które by nie trafiło na jego talerz wprost z głębin japońskich mórz, do piszącego te słowa Waszego sprawozdawcy podszedł minister Dziedzictwa Narodowego *Porando* i zaproponował mu osobistą pomoc w przygotowaniu pełnej, nowej, polskiej edycji „Dziennika”, który młodociany Bronisław Piłsudski pisał w latach 1882-1885. Minister powiedział, iż czytał rosyjskie wydanie „Dziennika” w opracowaniu niżej podpisanego i chce przyczynić się do ich polskiego wydania. Z wrażenia, piszący te słowa omal nie odrzucił wchłanianej właśnie porcji tak zwanego kelpu (morski wodorost). Gdy ochłonął, na znak zawartego paktu opiekun dziedzictwa narodowego kraju znanego jako *Porando* i Wasz skromny sprawozdawca stuknęli się wyleniałą resztką szampana (patrz zdjęcie).

Spizowy pomnik, hołd rządów Polski i Japonii, obietnica wydania „Dziennika” w języku oryginału – takie oto dary słoneczny i pachnący dzień 19 października 2013 roku ofiarował duchom Bronisława

Piłsudskiego i jego partnerki – Ciuchsammy. A w gronie żywych towarzyszył im i świętował ten dzień wraz z nimi ich wnuk najrodzeńszy – Kazuyasu Kimura.

I ja tam byłem; miód i... hola, hola! To jeszcze nie koniec. Następnego ranka, w mieście Sapporo – stolicy wyspy Hokkaido, na tamtejszym uniwersytecie odbyła się specjalna sesja naukowa poświęcona postaci Bronisława Piłsudskiego. Na wstępie była pompa z udziałem ambasadora RP w Japonii oraz wnuka Bronisława, Kazuyasu Kimury. Potem nastąpiła część seminaryjna: najpierw profesor Koichi Inoue odczytał list od profesora Antoniego Kuczyńskiego z Wrocławia, który, choć zapraszany, nie zdołał przybyć na seminarium. Następnie profesor Ewa Pałasz-Rutkowska z UW przybliżyła słuchaczom zarys stosunków japońsko-polskich w latach życia Bronisława Piłsudskiego. Niestety: wykład był po japońsku, ale opatrzona tymże przymiotnikiem aparatura audio-wizualna zawiodła na całej linii, tłumaczenie nie docierało do słuchawek i taki laik, jak Wasz uważny sprawozdawca wiele (a prawdę powiedziawszy, zupełnie nic) nie zrozumiał. Na koniec profesor Alfred Majewicz z Poznania, równie zasłużony na Bronisławowej niwie, co PT Kuczyński i Inoue przypomniał drogę ku dzisiejszej chwale naszego bohatera, zawiłe ścieżki, którymi jego dzieła pisane oraz zbiory materialnych artefaktów przedostawały się do świadomości obecnych pokoleń, gdzie obrosły w siłę i przebiły się na poczesne miejsce w globalnej kulturze narodów Europy i Azji. Profesor Majewicz mówił po angielsku, ale – najwyraźniej zmęczony uprzednią utarczką z panią Pałasz-Rutkowską - japoński sprzęt audio-wizualny podporządkował mu się niemal bez walki i działał tak, jak powinien, czyli rzecz na potrzeby japońskich słuchaczy na ekranie wyświetlał, a w słuchawkach tłumaczył.

Między te uczone dywagacje wdarł się ze swoim wykładem niżej podpisany, proponując, abyśmy się zastanowili nad narodową przynależnością rodu Bronisława i genetycznym splotem talentów, geniuszu, jak też przywar i udręk, jakimi rodzice obdarzyli Bronisława, Ludwikę, Adama i pozostałe rodzeństwo Piłsudskich. I gdy tak Wasz korespondent zbliżał się ku swym wysublimowanym wnioskom, kątem oka dostrzegł wbiegającą na aulę gromadkę poprzebieranych w powiewne kostiumy niewielkich rozmiarami, choć naładowanych energetycznie, istot. Sądząc, iż nastąpiła inwazja stworów pozaziemskich niżej podpisany karygodnie skrócił tok rozumowania i zamknął swą opowieść przyspieszoną konkluzją.

Wkrótce wyszło na jaw, iż niepotrzebnie spanikował, bowiem biali przebierańcy okazali się młodocianymi (nawet bardzo młodocianymi) artystami występującymi w przedstawieniu tanecznym sponsorowanym przez pewną zamożną damę z Sapporo. Przedstawienie to – będące ni to energiczną rozgrzewką przed zajęciami WF, ni to (jak twierdzą wtajemniczeni) „operą tańczoną” w swej ideologicznej wymowie nawiązującą do sakralnych tekstów ajnuskich zapisanych na wałkach fonicznych przez Bronisława Piłsudskiego - pobudzone niezwykle dynamicznym przytupem zatrzęsło aulą szacownego Uniwersytetu Hokkaido zaraz po odczycie profesora Majewicza... Gdybyż, ach, gdybyż owe tany mogli obejrzeć krzesający przed laty najostrzejsze hołubce soliści mundurowego ansamblu Armii Czerwonej? Czy dostrzegliby byli w białych przebierańcach nowych mistrzów swego kunsztu?

I ja tam byłem, miód i wino piłem, własnym okiem patrzyłem, biednym uchem słuchałem... - ale, ale! – to wciąż jeszcze nie koniec. Podochoceni artyzmem Bronisławowej „operetty” władze auli i w ogóle Uniwersytetu w Hokkaido po jakimś czasie postanowili, wbrew uprzednim ustaleniom, udostępnić łaknącym wiedzy internautom pełne teksty wykładów profesora Majewicza oraz niżej podpisanego. Karma więc chciała, że nic więc z tego, co miało być powiedziane, nie zostało uronione, mimo

karygodnie panikarskiej postawy waszego sprawozdawcy za mównicą Uniwersytetu w Hokkaido. Zainteresowanego czytelnika odsyłam do tzw. linku, który znajduje się tutaj [<http://hdl.handle.net/2115/53485>].

Ambasada Polska w Japonii, która była jednym ze fundatorów pomnika w Shiraoi wydała też z tej okazji krótką (przez to – cenną i unikalną) serię japońskich znaczków pocztowych z portretami „wielkich Polaków”. Na starannie skomponowanej karcie 10 znaczków, dominuje popiersie Bronisława Piłsudskiego.

A dalej? Dalej było Tokio i przyjęcie u premiera Japonii, Shintzu Abe. Dzięki uprzejmości profesora Inoue doświadczyli tej gościnności Alfred Majewicz i Witold Kowalski. Opuszczając progi oficjalnej rezydencji premiera Japonii, profesor Inoue wręczył pani premierowej, Akie Abe (kobiecie o sławie skądinąd nieco notorycznej), okolicznościowo wydaną przez Uniwersytet Hokkaido japońskojęzyczną pracę pod angielskim tytułem „The Achievements of Bronisław Piłsudski”, zawierającą między innymi treść wykładów panów Majewicza i Kowalskiego. Rozpatrywane w kategoriach *public relations* posunięcie profesora Inoue było całkiem mistrzowskie – gdyby wręczył księgę premierowi, ten by ją po prostu odłożył i zapomniał o niej w natłoku codziennej dłubaniny politycznej. A tak? – nie wiadomo; a nuż znana z nietuzinkowych pomysłów premierowa jednak za tę książkę przy jakiejś okazji chwyci...

I ja tam byłem, miód i wino piłem, jakieś „mydełko” (może czekoladkę?) na pożegnanie od premierowej dostałem, z jej podobizną na opakowaniu... No skąd? – koniec dopiero nastąpi.

I rzeczywiście nastąpił, nie koniec jeszcze, ale ciąg dalszy - dokładnie w dwa dni później. Kazuyasu Kimura, jedyny wnuk Bronisława Piłsudskiego i w ogóle ostatni z Piłsudskich (bez żadnej kądzieli, ale na nim „miecz” zaginie, bo los obdarzył go tylko córkami), bardzo uprzejmie zaprosił Waszego wysłannika na spotkanie rodzinne z pozostałymi potomkami Bronisława. Trzeba Wam bowiem wiedzieć, że poza Ciuchsamma nie miał Bronisław dzieci z żadną inną kobietą i że wszyscy jego wnukowie, prawnukowie i praprawnukowie mieszkają dziś w Japonii.

Na spotkaniu z niżej podpisanym w tokijskiej restauracji za stołem zasiadło kilkunastu potomków reprezentujących różne lineaze – ci z Hokkaido to wnukowie córki Bronisława – Kiyo; ci z Yokohamy są po Bronisławowym synu – Sukezo i jego z kolei synu – Kazuyasu. Oj, długo by wymieniać, kto był kim. Wasz sprawozdawca od razu się pogubił. Dzielna, najstarsza córka Kazuyasu, Kanako, poszła po rozum do głowy i rozrysowała skołowanemu przybyszowi z Europy schemat postaci: choćby ten, ten z naprzeciwka z policzkami rzeźbionymi, jak samuraj w filmach Kurosawy, to rzecz jasna wnuk Kiyo, Takahashi Mitsuo (jego córka Miki siedzi dalej po prawej), a ta obok ciebie to Sudou Yumi, siostra Mitsuo...

Zorientować się w tym zbyt łatwo nie było, dogadać się przychodziło jeszcze trudniej, bo przecież Bóg nam już przed wiekami pomieszał języki... W sukurs przyszło piwo i sake. Zagryzane, ma się rozumieć, następną odmianą mątwy i kałamara oraz potrawką z glonów na ostro. Nic to! – po 10 dniach w Japonii Wasz oddany korespondent był już na tyle uświadomiony w kwestiach kuchni japońskiej, że wiedział, iż na cukrzycę, raka, tlen pozakomórkowy, a zwłaszcza na radioaktywne izotopy jodiny pozostałe po niedawnym wybuchu elektrowni atomowej w Fukusahima, nie ma to jak „wodorost brązowy” (nazwany tak z czystej perwersji, bo po ugotowaniu zielenieje!)... I byle by nam się... Jako trunek sake jest może bez wyrazu, czy to na ciepło, czy na zimno, ale po paru czarkach świat robi się

przystępniejszy – nawet rzewny hymn Irlandczyków *Danny Boy* śpiewany *a capella* w tokijskim karaokie nie jest taki straszny. Jeszcze kilka kubków sake i grozę wzbudzający Takahashi Matsuo przyjmuje wreszcie do wiadomości, że niżej podpisany rzeczywiście nie wie, dlaczego w roku 1906 jego pradziadek Bronisław na pastwę losu porzucił jego prababcię Ciuchsammę (z dwojgiem maleńkich dzieci) i na zawsze odjechał w siną dal – taka widać im wszystkim pisana była karma... Parę dalszych dolewek i z Sudou Yumi wymieniamy krewniacze uściski, jakbyśmy się znali od niepamiętnych czasów. Zaś uroczej Kanako, prawnuczce Bronisława, z uporem tłumaczę, że mam nieżonatego syna, a ona przecież wciąż panienka; gdyby więc się umieli dogadać, to ja nie miałbym nic...

I na tym uroczystości ku czci Bronisława Piłsudskiego zakończyły się. *I ja tam byłem, miód i wino piłem, po brodzie sływało, do ust nie dostało...*

No, a pakt zawarty z obecnym dziedzicem Dziedzictwa Narodowego kraju zwanego *Porando* – co z nim, będzie dotrzymany? Cóż, jak wiemy, łaska pańska na pstrym koniu hula. Z drugiej jednak strony – *pacta sunt servanta*, mawiano przed laty... Tak było przed laty; jak będzie dzisiaj dowiesz się niebawem. Jeśli za rok, dwa przeczytasz w tym miejscu recenzję z nowowydanych „Dzienników” Bronisława Piłsudskiego, to wyjdzie na to, że politycy czasem dotrzymują słowa. A jeśli nie? – to nie...